
第3講 帝国主義の時代

① 19世紀後半のヨーロッパ国際関係

【1】ビスマルク外交

(1) ビスマルク外交（ビスマルク体制）の基本方針

- ・フランスの国際的孤立化政策を推進
- ・バルカン問題をめぐるロシアとオーストリアの対立を調停
- ・イギリスに協調

(2) ビスマルク外交の展開

- ・三帝同盟（1873～78）……ドイツ・オーストリア・ロシアで結成
- ・ロシア＝トルコ（露土）戦争（1877～78）
 - ・原因……ボスニア・ヘルツェゴヴィナのスラヴ民族（ギリシア正教徒）の反乱に対するオスマン帝国の弾圧を口実に、パン＝スラヴ主義の立場からロシアが開戦
 - ・結果……ロシアが勝利→サン＝ステファノ条約（1878）を締結
 - ・バルカン3国（セルビア・モンテネグロ・ルーマニア）の独立承認
 - ・大ブルガリアは自治権を獲得（ロシアが保護権）
- ・ベルリン会議（1878）
 - ・イギリス・オーストリアがサン＝ステファノ条約に反発
 - ・ドイツのビスマルクが仲介して開催（「誠実な仲買人」）
 - ・ベルリン条約（1878）
 - ・サン＝ステファノ条約の廃棄
 - ・バルカン3国（セルビア・モンテネグロ・ルーマニア）の独立を承認
 - ・ブルガリアは領土を縮小し、オスマン帝国内の自治領となる
 - ・オーストリアはボスニア・ヘルツェゴヴィナの管理権を獲得
 - ・イギリスはキプロス島の管理権を獲得
 - ・結果……ロシアのバルカン半島への進出阻止→ロシアの離反→三帝同盟崩壊
- ・独逸同盟（1879）……三帝同盟崩壊後に結成
- ・三帝同盟復活（1881～87）
- ・三国同盟（1882～1915）
 - ・ドイツ・オーストリア・イタリアで結成
 - ・フランスのチュニジア保護国化が契機（1881）
- ・〔独露〕再保障条約（1887～90）
 - ロシア・オーストリアのバルカン半島での対立による三帝同盟の消滅が背景
- ・ビスマルクが皇帝ヴィルヘルム2世と対立→ビスマルク辞職（1890）

〔テーマ学習〕

帝国主義

(1) 帝国主義の概念

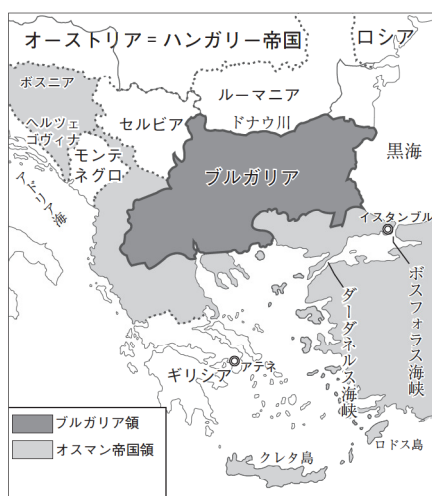
- ・他国家・他地域へ勢力範囲を広げようとする国家の膨張主義
- ・レーニンが『帝国主義論』で定義
- ・独占資本主義の段階

(2) 帝国主義の成立

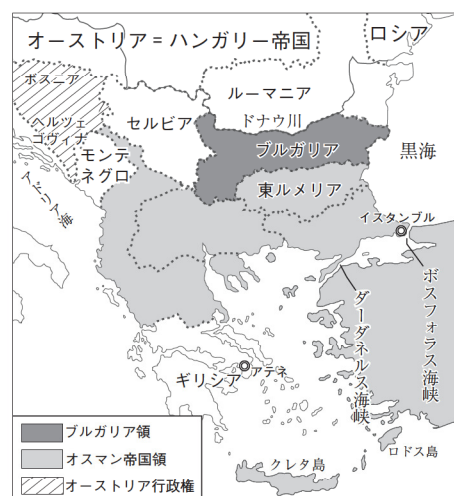
- ・石油・電力を中心とする重化学工業の発展（第2次産業革命の進展）
- ・企業の集中・独占の進展
- ・カルテル（企業連合）・トラスト（企業合同）・コンツェルン（多種企業の集団）
- ・金融資本（産業資本と銀行資本の融合）の成立
- ・資本の輸出を推進
- ・領土の租借・鉄道敷設権の獲得・鉱山採掘権の獲得
- ・世界の植民地の分割完了→再分割（再配分）要求→列強の対立激化

(3) 世界政策

- ・市場・原料供給地としての植民地や勢力圏の獲得を最大の目的とする
- ・後進地域への経済的進出をめざす→地球全体が資本主義体制に組み込まれて、名実ともに世界の一体化が実現



サン＝ステファノ条約



ベルリン条約